



日本の夏といえば夏祭りではないだろうか。参道に屋台が立ち並び、神輿を担いで汗水垂らし、太鼓の力強い音が響く。しかし、そんな身近な夏祭りについて、私たちはあまり理解していないのかもしれない。今回は日本の祭りの起源や継承、抱えている課題について特集した。

日本人に根付く 祭りの文化

祭りという文化

祭りの語源は「神にたて“まつる”」と考えられている。そのため、日本において祭りは神をもてなすために始まったと推測される。

現代日本の祭りには、アニミズム的な価値観を持つ神道が根底にある。加えて、飛鳥時代に伝来したとされる仏教などさまざまな信仰や考え方が祭りに影響を与え、形成している。

その中でも、日本神話が祭りという文化に与える影響は大きい。例えば、祭事の際、神前で執り行われる「神楽」は日本神話における「天岩戸伝説」が起源となっている。この神話は須佐之男命に対して怒り、天岩戸に引きこもってしまった天照大神に岩戸から出てきてもらうために、天鈿女命がその前で踊ったという伝承だ。

神話が神楽の起源となったように、神代から脈々と受け継がれてきたこの文化を、祭事を通じて学ぶことは普段の生活と一味違ったものとなるだろう。夏休みの期間に地元や全国の祭りを訪れ、私たちのルーツに思いをはせてみるのはどうだろうか。

祇園とねぶた

▼祇園祭

祇園祭は7月に行われる京都の祭りであり、その開催期間は1ヶ月にも及ぶ。多い日には30万人以上の観光客が訪れるという祇園祭。平安時代から千年以上続くこの祭りは、全国の祭りに影響を与えており、各地の夏祭りの起源となっている。そのため、全国の夏祭りには祇園祭と同様に、疫病などの災いを鎮め、悪霊を追い払うという目的のものが多い。

▼ねぶた祭

青森県内では各地で「ねぶた祭」と呼ばれる祭りが行われている。この祭りは、睡魔を払うことや死者を供養するために始まったとされている。紙と木によって作られたねぶたには、人形型と扇型と呼ばれる2種類が存在しており、どちらも非常に迫力がある特徴的な姿をしている。近年はアニメなどとのコラボも盛んだ。(清水翔太)

《参考文献》

『日本の祭り解剖図鑑：その起源と日本人の信仰がマルわかり』(久保田裕道、エクスナレッジ、2018年)

祭りの継承 伝統と柔軟性

日本に深く根付いている祭り。夏になると多くの人々が、夏祭りに足を運ぶ。日本の伝統的な祭りは、現代においてどのように継承されているのか。都市祭礼を研究する法政大学社会学部社会学科の武田俊輔教授に話を伺った。

祭りの名譽な役に選ばれるための競い合いや、先祖から引き継ぐ責任感、継承の要因となる。ただそれだけでなく、祭りの継承にはヒト・モノ・カネ・技能などの資源が不可欠だ。これらは地元から調達するものと、行政やボランティアなど外部調達のものに大別できる。戦前は都市の祭りは囃子や山車の曳行などで、外部から人を雇うことが主流だった。しかし、人手や資金の不足から、戦後は地元での育成に注力するようになった。

祭りの継承は口伝が多く、新型コロナウイルスの影響は大きかった。一方で祭りの過去を見直す機会にもなり、継承の方法を見直すことにつながった。決まった方式を受け継ぐだけでなく、時代に合わせる柔軟性を備えることも、祭りの継承には重要である。

こうした背景からコロナ禍においても、形や規模を変えて祭りは水面下で行われていた。武田教授は「祭りの継承には、祭りの可能性を広げる先読みのできる人が必要」と語った。今年の夏は、祭りの可能性を考えてみてはどうか。(高瀬菜穂子)

地域と学生 祭り存続への希望

祭りは今、存続の危機にひんしている。過疎化や少子化、若者の流出による担い手不足が大きな課題だ。将来の担い手はもちろん、現在祭りを行う人員さえ足りていない所も多い。

NPO日本の祭りネットワーク理事兼事務局長の加藤正明さんは「祭りの衰退は地域の瓦解を招く」と話す。祭りは人々のつながりを再確認する機会となり、日頃の声掛けや有事の際に助け合える関係を作る。地域の人々にとって祭りは祭り以上の意味があるのだ。

祭りが開催危機にひんする一方、地域と学生の協働により開催されている

祭りがある。新潟県関川村とNPO法人国際ボランティア学生協会(IVUSA)による「えちごせきかわ大したもん蛇まつり」はその一例だ。ギネス世界記録に登録された「竹とワラで作られた世界一長い蛇」を担ぐこの祭りは、100~200人の学生に力を借りている。

祭りの人員を補うだけでなく、学生には別の働きも期待されている。地域の存続のためには、村の一人一人が地域を支える必要がある。ボランティアで参加している学生には、そうした地域に貢献していく精神を村の人に伝える役割もあるようだ。

祭りを通じた地域との交流は学生にとって貴重な経験となる。IVUSAの活動に参加した冨塚さんは、新しく出会う村民との関係に苦勞するも、「また来てね」という言葉が嬉しく、再び

訪れたいとなると話す。IVUSAのOB・OGには関川村を第二の故郷と感じ、十数年来の付き合いをする方もいる。

祭りは新たな人とのつながりを築き、旧知の人とはその絆を再確認させる。そうした視点を持つ参加者が増えれば、祭りの存続に希望を持つことができるかもしれない。(秋田彩夏)



大したもん蛇まつりの様子

本格再開 三鷹阿波おどり

8月19日と20日に、本学に隣接する三鷹市で阿波踊りが開催される。三鷹阿波おどりの魅力や現状について、主催者である三鷹阿波踊り振興会の星野博忠副会長にお話を伺った。

今年で56回目を迎える三鷹阿波おどりは、阿波踊りとしては都内で2番目の歴史を持つ。地域振興を目的として始まったこの祭りは、コロナ禍前には1日に7千~1万人の観客を動員したという。

この祭り最大の魅力は、演者と観客の近さだ。駅前の通りで行うことから、鉦・笛・太鼓などのお囃子や踊り手が観客の目の前を通り過ぎる。観ていた人が飛び入り参加できる「飛び入り連」があるなど、祭りの魅力を最大限に引き出す取り組みがされている。

しかし、コロナ禍ではその近さが裏目に出てしまった。密な状況が起りやすい祭りの性質上、感染状況が落ち着いた限り企画自体が立てられない。昨年は三密を避けるため、事前告

知を必要最小限にし、祭りの規模を縮小するなど、感染対策を万全にして開催することができたという。

今年では4年ぶりに従来の規模で開催される予定だ。コロナ前の規模に近づけるため、今年から施される改良も多い。各出演連がとどまって踊る「組踊り」や「輪踊り」がその一例だ。また、複数の連が一緒になり踊る「総踊り」の導入など、新たな取り組みによってさらなる活性化を図っている。

星野さんは「阿波おどりをきっかけに地元を盛り上げるのがゴールだ」と語った。本学のボランティアセンターでは当イベントへの参加者を募集している。興味を持った方は、現地やボランティアセンターに足を運んでみてはどうか。(小川紀寧)



合同連による三鷹阿波おどり

編集後記

コロナ禍では密を防ぐために祭りを開催できず、私たちは風物詩のない夏を経験することになった。そこで今回は、本格的に再開した日本の伝統である「祭り」を特集した。

祭りの参加経験が少ない私のように、祭りへ積極的に参加する人は多くないだろう。祭りは人々のつながりを強める力がある。祭りに参加することで、新たな発見があるかもしれない。

そんな祭りが今、危機に直面している。祭りを含め、伝統的な芸能や産業は、担い手不足による問題が深刻だ。継承していくためには変化が求められる。伝統的な印象を持つ祭りは、実はその形を時代とともに変容してきた。旧来の形に執着し、継承できずに無くなってしまふのは本末転倒である。地域で話し合い、納得できる変容の合意点を見つけることが必要ではないか。

夏期休業期間には有名な祭りが多数開催される。祭りを通して伝統を感じ、夏を楽しもうと思う。(新渡戸常明)



本学体育会水泳部水球班(以下、水球班)は、華々しい活躍で注目を集めている。水球班の飛躍的な結果や結果を生んだ指導方法などについて、水球

その上で、志水さんは目標を達成できるように練習を組む。また、フィジカル班をはじめとする班に選手を班分けし、各班のリーダーが目標を決め、練

にシフトした。その結果、半年ほどで土台が完成し、高難度の戦術にも対応できるようになったという。

志水さんの尽力で大きく成長を遂げ

アメリカンフットボール 荒天の下 今季初白星 つかんだ

《試合結果》

○26-7 対東京学芸大

6月11日、アミノバイタルフィールドにて、関東学生アメリカンフットボール春季オープン戦が行われた。対戦相手は東京学芸大。今年度の公式戦初勝利をかけた一戦に臨んだ。

ダウン。続くキックにも成功し、7-0と先制した。その後も好守備から主導権を握り、第2クォーター9分にはフィールドゴールを決め3点を追加。直後に失点するも、リードを守り切った本学が10-7で前半を折り返した。

第3クォーター、早々から攻勢をかけたのは本学だった。敵陣深くまで攻め込みチャンスを作ると、開始6分には石綿が自らランニングプレーを仕掛ける。そのままエンドゾーンに到達し、これがチーム2本目のタッチダウンと

B田邊太基(システム4)が左サイドを駆け抜け、タッチダウンを決めた。ここで試合終了を目前に相手が棄権。荒天の下、攻守で躍動した本学が26-7と大差で試合に勝利した。

主将の上原大空(国際文化4)は「ボールを濡らして練習するなどの工夫が、悪天候対策に功を奏した。上部リーグ進出のため、あらゆる面で向上を続けたい」と語った。(万浪耀)